

江島其磧『那智御山手管滝』攷

桑 原 明 花

一・問題の所在

『那智御山手管滝』（以下、『手管滝』と略す）は、享保一八年〔一七三三〕正月に京都八文字屋によって出版された大本五巻五冊、江島其磧作の時代物浮世草子である^{〔注一〕}。『平家物語』などに見られる文覚の出家遁世譚をベースに、遠藤武者盛遠に殺されずに遊女となった袈裟御前、片田舎で暮らす源左衛門尉渡、大坂で隠居生活を送る盛遠の三名が再会する筋書きになっている。

早い段階で『手管滝』について言及したのは、長谷川強『浮世草子の研究―八文字屋本を中心とする―』^{〔注二〕}である。現今の研究の基礎となるため、該当部分を以下に示す。「那智御山手管滝」は近松作かといふ「一心五戒魂」（元禄十一年、竹本座上演）による。同浄瑠璃の外題替の「復

鳥羽恋塚」が享保十年六月十五日より竹本座上演された事からとり上げられたのであらう。「五戒魂」による事は板心に「五戒」と刻するによつても知れるのであるが、その関係は右に述べた諸作に比べると大分薄い。……「五戒魂」と関係のあるは橋普請の事、為若の名、浄瑠璃では為若が母の姿絵を持つとする姿絵の三点であらう。渡が袈裟を見染るは「五人女」三の一により、夫遭難と聞き再婚後前夫の帰来するは「懐硯」一の一四による。構成の主要部を西鶴の模倣・剽窃も。……中間部は全く好色物調で西鶴の模倣・剽窃も目に付くのである。構成も緊密とはいへぬ。

長谷川論考は、浄瑠璃『一心五戒魂』の書き替えであること、西鶴の浮世草子の影響が随所に見受けられることを指摘する一方、西鶴からの「模倣・剽窃」の多さや構成に

緊密さを欠く点から、高い評価は与えていない。その後、浄瑠璃との関連については、『八文字屋本全集^(注3)』所収『手管滝』『解題』（若木太一執筆）も、長谷川氏論を参照したうえで同様の見解を記し、近時刊行された『浮世草子大事典』^(注4)の『手管滝』項（高橋柳二執筆）では、「夫盛遠が船の遭難で死んだと聞き袈裟再婚、その後突然夫が帰って来るというのは『懷硯』や『万の文反古』に拠る。遊里の場面には『好色一代男』や『諸艶大鑑』を彷彿とさせる部分が少なからずあり、西鶴の影響が強い。」と、新たに『万の文反古』（元禄九年「一六九六」刊）、『好色一代男』（天和二年「一六八二」刊）、『諸艶大鑑』（貞享元年「一六八四」刊）などの西鶴作品との関連をあげている。細かいところでは、巻一の一冒頭の文言について、神谷勝広「其磧と中国故事」^(注5)が花堂斧磨作・宝永七年「二七二〇」刊の浮世草子『当世誰身の上』の引用であると指摘しているが、本作の内容には言及していない。

以上、物語の構想に関わるものとしては浄瑠璃『一心五戒魂』と『鳥羽恋塚物語』が、作品を好色物調に仕立てるために西鶴の浮世草子『好色五人女』『好色一代男』『諸艶大鑑』『懷硯』『万の文反古』が、中国故事の引用として『当世誰身の上』が使用されていることが先学によって明らかにされてきた。しかし、筆者が調査したところ、既に言及があるもの以外にも、本作の典拠と考えられる作品はいく

つか存在する。

そこで本稿では、『手管滝』には、未だ明らかにされていない典拠があることを提示し、その上で本作の特徴について論じたい。

二・西鶴浮世草子の利用

先行論の指摘以外にも西鶴作品の引用がいくつか看取できる。

『手管滝』一の一、袈裟の母である衣川の若い頃の様子を記した一場面^(注6)、

磯の禪師といふ白拍子の弟子となして。舞子に仕立。上つかたの御前様へ一夜づ、お慰にあげける。衣装も大かたに定れり。紅がへしの下着に箔形の白小袖を重ね黒きそぎ襟をかけて。帯は三色左縄うしろむすびにして。金作りの木脇指。印籠巾着をさげ。髪は中剃するもあり。つとして若衆の如く仕立るもありける。

（引用文における傍線は筆者による。以下同）

この記述が貞享四年刊の『好色一代女』一の二の利用とらしい^(注7)。

うるはしき娘を此業に仕入て、うへつかたの御前さまへ、一夜づ、御なぐさみにあげける。衣装も大かたに定まれり。紅がへしの下着に、箔形の白小袖をかさね、

黒きそぎゑりを掛けて、帯は三色ひだり縄うしろむすびにして、金作りの木脇差、印籠・きんちやくをさげて、髪は中剃するも有、つとして若衆のごとく仕立ける。傍線箇所の記事がほぼ一致することが確認できる。其蹟は衣川の衣装の描写について、『好色一代女』を利用したのである。

他にも、『手管滝』一の三、渡の囲う遊女藤紫を念頭に、世の男達が遊女を請け出して囲う際のありようについて語る地の文、

大分の金を出して女郎を引ぬき。妻のごとく宿に置いて。始末らしき算用を聞せ。味噌しほのせんぎ迄世話させ。又はつとめの中にあふたる男に顔見あはさせ。彼は心のよからぬ事ばかりなり。女郎請出して楽みにするといふは。下屋敷に置いてをり／＼かよひ女にしてこそ。色里の思はく。一人の慰にも成ぬ。宿において女房ときはめ。世帯のせわやかせば。地女房の少し風儀のよきぶんなりと。

は、貞享五年刊の『好色盛衰記』四の三に共通する描写が見える。(注9)

惣じて女良をひきぬき。妻のごとく宿に置いて。始末らしき算用を聞せ。又勤めのうちにあふたる男に。兒見合させ。彼は心のよからぬ事なり。菟角下屋敷に置物。折／＼通ひ女にしてこそ色里のおもはく。ひとし

は慰みにもなりぬ。毎日四十六匁が物ぞかし。宿に置ては地女のすこし風義のよきぶんなり。

これも文言がほぼ一致しており、『好色盛衰記』の引用であることがわかる。

さらに、貞享四年刊の『男色大鑑』四の二の利用も見て取れる。『手管滝』二の二で、藤紫は自ら渡の身代わりとなつて盛遠に討たれる。盛遠に藤紫を襲わせるために、渡の草履取りが裏切つたふりをしてあえて渡の居所を盛遠に告げる以下の場面、

此節不奉公のつらがまへ。年月の恩をしらぬ僕めとて。傍輩の中にて立蹴にいたされ。手討にせんとせられしを。漸かけぬけはへ帰り参るのうへは。命を御すくひくだされ。御ざうり取にめしか、へ下されなば。有がたく存ずべし。いかに下人なればとて。主命そむくべきにはあらず候へども。武士の討果さんとおるを聞て。立退んと心底。臆病至極の主人見かぎりはて。

が、『男色大鑑』四の二、想い人の身代わりとなつて討たれる決心をした主人の居所を敵に告げ、襲わせようとする下男の場合と共通する。(注9)

拙者は胸にあたはざる兒つき、年月の恩をしらぬやつがれとて、諸人中にて蹴立られ、手打にせんといさまれしうちに、やう／＼かけぬけ、是に参るのうへは、命を御すくひ給はれ。いかに下人なればとて、主命そ

むくべきにはあらず候へ共、武道ににあはざるたくみ、
こなたにも御侍なるに、昼中名乗あひ、ぞんねん晴さ
れんを見かぎり、

傍線部の中でも、「年月の恩を知らぬやつがれ」という
特徴的な語彙が一致しており、『男色大鑑』を利用したと
考えてよい。

先行論では、『手管滝』での西鶴作品の「模倣・剽窃」は、
主に遊里の場面で散見されるとされていたが、『男色大鑑』
のように、遊里とは特に関係のない引用例も確認できる。
また、『男色大鑑』は、文章の引用だけでなくその前後の
展開にも類似が見られる。文覚の出家遁世譚にも、袈裟が
渡の身代わりとなり、寝ているところを盛遠に討たせる展
開があるが、『手管滝』では袈裟は死なず、代わりに藤紫
が渡を装い夜道を歩いているところを討たれ、死亡する。
これは『男色大鑑』に近い。「身代わりとなつて殺される」
という設定は残しつつも、文覚の出家遁世譚そのままでは
なく、『男色大鑑』から文章を引用し、読者に想起させる
ことで、他の文覚の出家遁世譚を利用した作品との違いを
強調しようとしたのではないか。このように、西鶴作品の
引用は、本作を好色物調に仕立てるためのものだけではなく、
物語の展開をより引き立てるための其積の工夫であつ
たとも考えられる。

先行論や本稿で指摘したものを含め、西鶴浮世草子は『手

管滝』以外の其積作品でもたびたび利用されており（注10）、
本作でもその関係の深さは確認できる。

だが、『手管滝』が利用する作品は西鶴浮世草子以外にも
存在する。

三、『伽婢子』『金玉ねぢぶくさ』の利用

『手管滝』巻一では、盛遠が熊野沖で遭難し、「滄浪の国」
という仙境に漂着する。この「滄浪の国」については管見
の限り先行研究では言及がない。だが、浅井了意作の怪異
小説集『伽婢子』（寛文六年「一六六六」刊）六の一「伊
勢兵庫仙境に到る」に共通点を見出した。

では、両書の関連を検証するため長文ではあるが、『手
管滝』一の二の該当箇所を示す。

扱も某七年以前の今月今日。大船に打乗①南を指てを
し出す所に。熊野浦とおほしき所にて。②俄に悪風吹
来つて波高く上り。雪の山のごとく大船岩にあたつて
微塵になりし時。私壺人すかさずてんま船に打乗しに。
風つよく③吹はなされ。南をさしてゆく事。夜る昼の
さかいなく。十日ばかり行ければ。風少吹よはり。一
つの嶋にながれより。岸に上りて見れば。岩石そばだ
ちて青きは碧瑠璃のごとく。いまだ日本の地にしては。
見ざる所の草木共生茂り。④あやしき人磯ちかく出た

るを見れば。頭は唐子わけにして。身には金襴の衣裳を着し。絵に見し⑤唐人の舩に似て。物いひは日本のこと葉につうじ。我を見て大きにあやしめ。いづくより来れるものぞとがめしゆへ。有の儘二語りしに。かの異人いふやう。爰は滄浪の国といひて。日本の地よりは南の方三千里に及べり。則観音の浄土補陀落世界も程ちかし。しばらく爰に滞留して。時節を待て帰国あるべしと。情ふかく我家二つれ帰り。様もてなし。食類の味中／＼詞につくされず。名酒と覚て⑥玉の卮をもつて数盃のむに酔事なく。神気さはやかにして心よく⑦嶋の男女を見るに。いづれも甘計に見えて。老たる人はひとりもなくかほかたちうるはしく。ひとへに仙境に至る思ひをなして。七年の星霜を送る所に。けふこそさいわい。日本への便船ありとの知らせによつて。古郷忘じがたく。いとま申て船に打乗ければ。⑧順風徐々として吹おこり。わづかに三日をへて肥前の松浦に着て。それより夜を日についでのはりぬ。

次に、『伽婢子』六の一を見てみよう^(注11)。

吉日をえらびて海にうかび、①南をさしてをし出す、心のうちこそはるかなれ。伊豆のおきには七島ありといへり。いづれとはしらず島ちかくをしよせしところに、②にはかに風かはり、なみたかくあがつて雪の山のごとし。江雪はとかくしてひとつの島につきてあが

りしかば、年ごろ聞つたへし八丈が島につき、島のありさま人のよそほひよく見めぐりてかへりぬ。兵庫頭は③吹はなされて南をさしてゆく。夜るひるのさかひもなく、十日ばかり行ければ、風すこし吹よりはり、ひとつの島にながれよりたり。岸にあがりてみれば、岩石そばだちて、あをきは碧瑠璃のごとく、白きは珂雪のごとく、黄なるは蒸栗に似て、赤きは紅藍花に似たり。其外種々の奇石、日本の地にしてはまだ見ざる所也。草木のありさま又めなれざる花咲、このみ結べり。④あやしき人いそちかく出たるをみれば、……、⑤かたちはもろこし人に似て、物いひは日本のことばに通ず。兵庫頭を見て大にあやしみ、「いかなるものぞ」と問ければ、兵庫ありのまゝにかたる。此人いふやう、「こゝをば滄浪の国と名づく。日本の地よりは南のかた三千里に及べり。これより観音の浄土補陀落世界も程ちかし。いにしへ淳和天皇の御時に……こなたへわたりて、心をやすめられよ」とて、家につれてかへり、九節の菖蒲酒、碧桃の花薬酒をいだし、⑥玉の卮をもつてこれをすゝむ。兵庫頭数盃をかたふけしに、神気さはやかにおぼえたり。……⑦をよそ国中の男女いづれもよはひ甘ばかりにて、老人はひとりもみえず。そのかほかたちのうるはしき事、日本の地にはいとまれなり。……いかにもして古郷にかへらむ」と思ひ、あ

るじに「かうく」といひければ、……ともづなときてをし出せば、⑧順風徐々として吹おこる。すでに帆をひきあぐれば、一日のほどに伊豆の浦につきたり。

①「南を指てをし出す」こと、②「俄に風」が吹くこと、③日本の地にはないような島にたどり着くこと、④「あやしき人」が登場すること、⑤「滄浪の国」という島の名や「補陀落世界」に近いこと、⑥「玉の卮」で飲むと「神気さはやかにおほえ」ること、⑦島にいるのは若く美しい外見をした男女だけで老人はいないこと、⑧島を出立したところ「順風徐々」と追い風が吹いて日本に到着すること、以上の八点から、両書の展開が共通する上に語彙も一致することがわかる。

『伽婢子』は中国小説の翻案作品を多く収録し、この「伊勢兵庫仙境に到る」の原話は「杜陽雜編」下「処士元藏幾自言云々」である^{〔注12〕}。話の大枠は同じだが、舞台が日本と中国とで異なるため、細部に違いが生じている。『杜陽雜編』の該当箇所には^{〔注13〕}、「洲人曰此乃滄浪洲去中國已數萬里乃出菖蒲酒桃花酒飲之而神氣清爽焉其州方千里花木常如二三月」とある。『杜陽雜編』では「滄浪の国」ではなく「滄浪洲」であること、「補陀落世界」が原話には見られないことから、『手管滝』が『杜陽雜編』を直接参考にしたとは考えにくい。前掲神谷論考が「其蹟は、数多くの中国故事を中国の原典から直接に引用したのではな

く、仮名草子・浮世草子・教訓啓蒙書・軍記物語・通俗軍団を通して取り込」むことを述べ、『伽婢子』を好んで引用していたことも指摘している。このこともふまえると、其蹟が『伽婢子』を引用したと考えてよい。

さらに調査したところ、『金玉ねちぶくさ』の利用と思しき箇所も発見した。『金玉ねちぶくさ』は元禄一七年刊の諸国咄形式による怪談奇談短編集である。著者の章花堂は名以外の詳細は知られていない。同時期の怪談物浮世草子とは異なり、中国を種とした話と思われるものは少なく、各編の出典に関しては未だ明らかになっていない部分も多い^{〔注14〕}。

『手管滝』巻一、盛遠が海で遭難し死亡と聞いた袈裟が渡と再婚、子供を設けたあとに盛遠が帰来して激怒するという展開は、前述したように、『懷硯』一の一四、『万の文反古』四の一の趣向によると先行論で指摘があった。しかし、この場面には『懷硯』『万の文反古』だけでは説明しきれない点がある。そこで、『懷硯』『万の文反古』両作品のうち、どちらがより『手管滝』に近い検討し、本作との相違点をあげた上で、物語の設定・展開を補完する形で、『金玉ねちぶくさ』が存在することを示したい。

『懷硯』『万の文反古』ともに、夫が水難に遭い、妻は新しい婿と祝言をあげるが、死んだはずの夫が帰来するという話の大筋は同じである。これは『手管滝』にも共通して

いる。異なるのは三人が死亡する結末部分だろう。

『懷硯』は、久六が仲の悪かった木工兵衛と妻を怒りに任せて刺し殺すが、『万の文反古』は利平・利左衛門の兄弟納得の上での相討ちである。妻こよしも利平に殺されたわけではなく失踪である。『手管滝』は、夫・妻・新夫の三人は死亡していないが、盛遠は激情のまま袈裟を斬り捨てようとし、渡の身代わりとなった藤紫を討っている。また盛遠と渡は以前に諍いがあり、仲が悪いことが本文で語られている。これらのことから、『手管滝』により近いのは、『懷硯』の一の四と考えられよう。

一方で、『懷硯』のみを典拠としたのでは説明できない点がある。夫が海で遭難し、妻が再婚する点、夫が再婚後に帰来する点、激怒した夫が二人を斬り殺そうとする点は共通するが、帰来する時期が一年後と七年後という違い、妻と新夫が同衾するところに帰来する展開と夫の法要中に帰来する展開の違い、夫の遭難した先が日本と「滄浪の国」という仙境である違いなど、異なる部分も見られる。

そこで着目するのが、『金玉ねちぶくさ』六の二「箕輪の滝は弁財天の浄土」である。以下に梗概を示す^(注5)。

箕輪の滝に少女が誤って落ちてしまい、死亡したと判断されて七年が経つ。七回忌の追善を行っている最中、当の少女が当時から七年経った姿で現れると、居合わせた人々は恐れて肝を潰す。両親が恐る恐る話を聞く

と少女は、「箕輪の滝の先の弁財天の浄土で過ごしていた」と語る。

話の大筋としては、先述した『懷硯』と近いが、細かい設定部分で『手管滝』と共通する。『手管滝』一の二の、盛遠入水の日も。今年七年になれば。菩提所上品上生寺にて。①七回忌の追善。善つくし美つくし。一家一門参り集り。……只今遠藤武者盛遠さま。御無事にて御帰り。追付はへ御入と申二。②一座の衆中大かたならず肝をつぶす。……和尚掌を合せて。③あさましや汝誠の盛遠にあらず。

と、『金玉ねちぶくさ』六の一「箕輪の滝は弁財天の浄土」けふは①七回忌の命日なればとて、隣家の婦女をよび集、こゝろばかりの①ついぜんをなせしが、……②人々おどろき肝を消し、「是は如何成わざならん」と、十方へにげちりしが、……③「さては幽霊のあらはれしや」と、他人はいよく恐れぬれ共、

とで、①「七年」の歲月と「追善」という語彙、②法要の最中に帰来し、その場の人々が驚き肝を潰すという描写、③人ならざるものではないかと疑う点が共通する。また、死んだと思われていた間、『手管滝』では「滄浪の国」、『金玉ねちぶくさ』では「弁財天の浄土」という仙境に行っていたという点も類似しているよう。つまり『手管滝』のこの場面は、『伽婢子』と『懷硯』『金玉ねちぶくさ』が混在し

ていると考えられる。

『伽婢子』『金玉ねぢぶくさ』は両作品ともに、『手管滝』の次作で、享保一九年に出版された『都鳥妻恋笛』で利用されていることが、木越治「八文字屋本時代物と怪異小説——『都鳥妻恋笛』の場合——」^(注16)によって指摘されている。そのことから、前作である『手管滝』で使用されていたとしても不思議はない。

木越論考によれば、『都鳥妻恋笛』は、『伽婢子』『金玉ねぢぶくさ』『増補江戸咄』など、先行する怪異小説を頻繁に用いることによって、時代物浮世草子には珍しい伝奇的要素を持ち、それにより何度も形を変えながら江戸時代を通して親しまれる作品になったという。とすれば、この指摘は本作においても当てはまるであろう。つまり、『那智御山手管滝』は、『都鳥妻恋笛』に先行する怪異要素を有した作品として評価できるのではないか。

四・〈景清物〉演劇・浮世草子の利用

本章では、謡曲などに見られる〈景清物〉の登場人物が『手管滝』巻三に現れることに注目し、数ある〈景清物〉諸作品の中から、『手管滝』が影響を受けた作品について検討する。

『手管滝』巻三では、悪七兵衛景清の子孫で景清悪衛門

と名乗る男が、景清由来の物品を渡す伯父榎原勘大夫の質に入れ、それを勘大夫の息子左近が盗む。そして左近は身請け金二百両のかたとして、質屋みおのや四郎兵衛に物品を渡す。ここに登場するみおのや四郎兵衛も、〈景清物〉に登場する三保谷四郎の子孫という設定になっているが、これまで〈景清物〉との関係は注目されてこなかった。

其蹟が〈景清物〉を好んでいたことは、享保七年刊『桜曾我女時宗』、元文二年「一七三七」刊『風流東海硯』でも、悪七兵衛景清・三保谷四郎を登場させていることから推察できる。〈景清物〉について、山本二郎「景清物の系譜」^(注17)は、景清が「近世の戯曲の中では登場頻度の高い人物で、それだけ江戸人の関心が深かったことがわかる。」と述べている。〈景清物〉の登場人物達は、物語の本筋に関わらずとも、名前を出すだけで読者の興味を引くことができたということだろう。

〈景清物〉を扱った作品は謡曲『景清』『大仏供養』を始めとして多く存在するが、『手管滝』に近い時期では、西沢一風・田中千柳作^(注18)の浄瑠璃『大仏殿万代石楚』がある。『大仏殿万代石楚』は享保一〇年に大坂豊竹座で上演されており^(注19)、これは、『手管滝』の基づいた『一心五戒魂』の外題替『復鳥羽恋塚』が上演された年と同年である。其蹟が『手管滝』を執筆する際に参考にしたとしても不思議はない。

この『大仏殿万代石楚』第四段に、『手管滝』四の二、遊女となり住の江と名乗る袈裟を盛遠が訪問する場面と類似する趣向がある。全盛の遊女の描写、遊女を買おうとする武士姿の者、しばらく空きがないと断る主人に袖の下を握らせる、会った遊女はまさしく探していた女だった、という展開が共通しているのである。以下に『手管滝』本文を引用してみよう。

誰かれと身よし大臣共。先番後番をあらそひ。①来年の九月迄は。段々の約束きはまり。隙日といふては一日もなく。……半日成共もらひて一座でおかほ成共見たきとの願ひ。名にしおふ全盛の大夫殿事なれば。定て出られぬさきから。契約の日もつまり。急々の御げんは成まじけれど。そこをひとえに夫婦をたのむと。

②まづき、薬の万金丹一はいづ、はづめば。

次に、『大仏殿万代石楚』第四段の箇所は、

「売ふ為に拵た君お心安いことさりながら。此の里始つて全盛の太夫様①先約だんく。まだふた月や三月ではお手には入ぬ。外に物好きなされませ。」「いやく其君ならで外にみちんも恋は無し。貰ふの借るのという事も有と聞及ぶ」と。懷に手をさし入武士には物の角取れて。働給へ亭主めと②いひびつなりの氣の薬。ほつかりと握らすれば。

である。本文の語彙が一致するわけではないが、①全盛の

大夫で数か月先まで予約が埋まっていたと会えないと主人が断る点、②「万金丹」と「いひびつなり」で表現が異なるが、袖の下を握らせて遊女に会おうとする点が共通している。よって、『手管滝』は『大仏殿万代石楚』の影響を受けていると考えられよう。

さらに、『大仏殿万代石楚』の名目上作者の一人である西沢一風作『御前義経記』利用についても確認したい。

『御前義経記』は大本八巻八冊の浮世草子で、元禄一三年三月に出版された。大枠において『義経記』をやつしており、近世文芸の表現技法「やつし」の成立に与った重要な作品であると位置づけられている(注20)。

今回提示したいのは、尋ね人の姿絵の趣向である。『御前義経記』八の一では、尋ね人を捜すため、姿絵の札を京橋とけいせい町の門に立てる。一方『手管滝』四の一でも、盛遠が京橋の前に立てられた尋ね人の高札を見つけ、袈裟に瓜二つの姿に恋しくなり家に持ち帰る。このように、高札を立てる、立てられた高札を持ち帰る、という場面展開は異なるが、高札に書かれた文言と、該当部分の挿絵に似通う箇所が見受けられる。高札に書かれている文言の比較してみよう。

『手管滝』四の一では次のように書かれる。

此図のごとく成女。下に白無垢。上に又布の袷引はり。浅黄ちりめんの引しごき帯。緋縮緬の二布。玳瑁の櫛

二枚さし。年の比廿五六、名は住の江と申候。先々月五日の夜よりくるわを走り。行方しれ申さず候。若御見あたりなされ候はゞ。早速当町の色町。難波や浜右衛門所迄御しらせ下さるべく候。御しらせ下され候御方へ。急度御札申べく候

続いて、『御前義経記』八の一は以下の通りである（注21）。

当年十九才の女左の目の下にはくろ有。此図にあふたる女御ぞんじあらば。早速此所へ御しらせ有べきよし。

右のように、『手管滝』の方がより詳しく女の姿を記しているが、所々に語彙の一致箇所が見られる。『一心五戒魂』にも絵姿の趣向はあるが、高札ではない。また、当該場面の挿絵を示すと、



（図1）『手管滝』巻四の一・五才



（図2）『御前義経記』巻四の一・五才

『手管滝』（図1）では高札を自宅に持ち帰り、部屋の隅に置く様子が描かれているが、『御前義経記』（図2）でも部屋の中に高札が置かれる様子を描く。室内に置かれた高札が印象に残る挿絵となっており、両書の関係が見出される

のではないか。

高札の文言と挿絵の類似から、『手管滝』の趣向は、西沢一風『御前義経記』を基にしたと考えられる。『手管滝』の先行研究では、一風からの影響は特に指摘されてこなかったが、其蹟による一風利用という課題を示唆するように思われる。

五. まとめと今後の課題

― 改題本『袈裟物語』の挿絵 ―

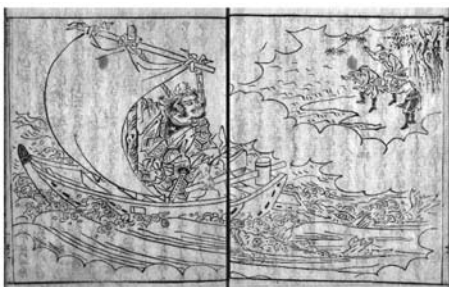
以上、『手管滝』の未だ言及されていない趣向の典拠について論証を行ってきた。新たに『好色一代女』一の二、『好色盛衰記』四の三、『男色大鑑』四の二、『伽婢子』六の一に関してその引用を明らかにし、『金玉ねぢぶくさ』六の二、『大仏殿万代石楚』第四段、『御前義経記』八の一については両書における影響の可能性を提示することができた。其蹟は『手管滝』執筆にあたり、西鶴浮世草子だけでなく、怪異小説や一風作品を用いた。この手法は、後の『都鳥妻恋笛』執筆にもつながる。

最後に、物語の趣向と挿絵の変更という観点から、『手管滝』の改題本『袈裟物語』に着目したい。

『手管滝』には改題本『袈裟物語』が存在する。寛政九年「一七九七」に『手管滝』の本文を同一のまま読本風に



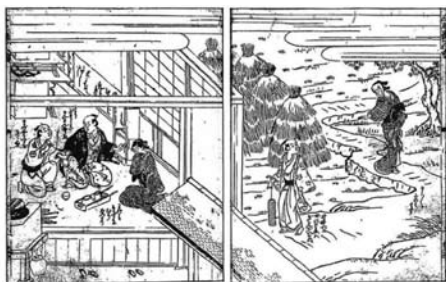
(図3)『手管滝』巻一の三・廿ニウ廿三オ



(図4)『袈裟物語』巻一の三・廿ニウ廿三オ

仕立て直して出版したもので、序・目録・章題・挿絵等が差し替えられている。序者の一物子については詳細が明らかになっていない^(注22)。挿絵の枚数は『手管滝』も『袈裟物語』も各巻ごと見開きで二丁ずつ、全五巻で計一〇丁であり、枚数に変更はない。しかし、すべての挿絵が差し替えられているものの、場面が大きく変更された挿絵が三枚ある。その内の二図が、本稿で提示してきた『伽婢子』由来の怪異要素、〈景清物〉の登場人物と関わっている。

『手管滝』の挿絵(図3)が、『袈裟物語』(図4)では「滄浪の国」を出立する盛遠とそれを見送る「滄浪の国」の島人となっている。「滄浪の国」の典拠は先に示したように『伽婢子』である。『袈裟物語』の「滄浪の国」描写(図4)は、『手管滝』の挿絵(図3)では一切触れられていない。また、『袈裟物語』の挿絵(図6)を見ると、杖をついた人物が携えた帳面に「みをのや四郎兵衛」という名が見える。先述したように、みおのや四郎兵衛は〈景清物〉に登場する三保谷四郎の子孫という設定であり、本稿で〈景清物〉の浄瑠璃作品『大仏殿万代石楚』の影響を受けていることを明らかに



(図5)『手管滝』巻三の三・廿三ウ廿四オ



(図6)『袈裟物語』巻三の三・廿三ウ廿四オ

かにしたが、『手管滝』本文中のみおのや四郎兵衛の役割は薄く、『袈裟物語』の挿絵に登場させるほどの人物とは考えにくい。

改題本を出版するにあたって、挿絵の場面を変更したということは、そこに何らかの意味があると考えることができるのではないか。つまり、『伽婢子』由来の怪異要素と、人気のあった題材である〈景清物〉の趣向とが好評を博し、読本風に仕立てた改題本『袈裟物語』の出版の際に、挿絵によってさらに読者の興味を惹くため、『手管滝』で好評だった場面、すなわち『伽婢子』の引用部と〈景清物〉関連の登場人物が採用されたのではないだろうか。あるいは、『読本風』に仕立てるには、そういった怪異などの要素が挿絵に必要だったのかもしれない。だとすれば、先行研究では注目されてこなかった「滄浪の国」、および〈景清物〉の登場人物の描写は、『手管滝』を評するうえで不可欠であり、かつ改題本出版へとつながる要素と考えられる。

なお、『都鳥妻恋笛』も後に『梅若丸一代記』（天明八年「二七八八」刊）と改題して出版されている。このような改題本と挿絵の問題については、今後の課題としたい。

注

- 1 長谷川強監修『浮世草子大事典』（笠間書院、二〇一七・二〇）を参照した。
- 2 長谷川強『浮世草子の研究―八文字屋本を中心とする―』（桜楓社、一九九一・一一）四五〇頁より引用した。
- 3 長谷川強編『八文字屋本全集¹²』（汲古書院、一九九六・七）。注1に同じ。
- 4 『国語と国文学』六九巻・二号、一九九二・二。
- 5 注3『八文字屋本全集¹²』より引用した。以下、『手管滝』本文の引用はこれによる。
- 6 麻生磯次・富士昭雄訳注『対訳西鶴全集³』（明治書院、一九八三・九）。
- 7 麻生磯次・富士昭雄訳注『対訳西鶴全集⁴』（明治書院、一九八三・一〇）。
- 8 麻生磯次・富士昭雄訳注『対訳西鶴全集⁶』（明治書院、一九八三・一一）。
- 9 注1『浮世草子大事典』、注2長谷川論考、塚田義房「西鶴と其磧(1)」(『上武大学論集』一六号、一九八五・二)、佐伯孝弘「其磧氣質物の方法―西鶴利用の意図―」(『江島其磧と氣質物』、二〇〇四・七)などを参照した。
- 10 松田修・渡辺守邦・花田富二夫校注『新日本古典文学大系75 伽婢子』(岩波書店、二〇〇一・九)より引用した。
- 11 江本裕校訂『東洋文庫475 伽婢子^①』(平凡社、一九八七・九)。
- 12 (晋)郭璞注『四書筆記小説叢書山海経(外二十六種)』(上海古籍出版社、一九九一・一二)より引用した。
- 13 木越治校訂『叢書江戸文庫34 浮世草子怪談集』(国書刊行会、一九九四・一〇)、解題(木越治執筆)を参考にした。以下、『金玉

ねちぶくさ』の本文はこれによる。

15 注14『金玉ねちぶくさ』本文を参考に筆者が執筆した。

16 木越治「八文字屋本時代物と怪異小説―『都鳥妻恋笛』の場合―」
（『近世文藝』六八号、一九九八・一）。

17 『軍記物とその周辺』（早稲田大学出版部、一九六九・三）。

18 長友千代治「文流・一風・千柳」（浅野見・雲英末雄・谷脇理史・原道生・宗政五十緒編集『講座元禄の文学④元禄文学の開花Ⅲ―近松と元禄の演劇―』勉誠社、一九九三・三）による。実際の執筆は千柳にまかせ、一風自身は看板・顧問・相談格として題材の選択・構想・趣向面で活躍していたようである。

19 原道生校訂『叢書江戸文庫10 豊竹座浄瑠璃集①』（国書刊行会、一九九〇・二）、『天仏殿万代石楚』「解題」（黒石陽子執筆）を参考にした。なお、本文の引用もこれによる。

20 注1『浮世草子大事典』『御前義経記』の項（井上和人執筆）を参考にした。

21 西沢一風全集刊行会編『西沢一風全集①』（汲古書院、二〇〇二・八）より引用した。

22 注3解題（若木太一執筆）による。

図1・3・5は『八文字屋本全集⑫』から転載、図2は『西沢一風全集①』から転載、図4・6は国立国会図書館蔵『袈裟物語』（請求番号：京一三〇、国立国会図書館デジタルコレクション）によった。

【附記】図版の掲載を許可していただいた国立国会図書館に、感謝申し上げます。

（くわはら めいか）